

美しき女への条件

草柳大蔵

美しき女への条件

昭和五十一年九月十日 第一刷発行

著者／草柳大蔵

発行者／石川数雄

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六

郵便番号 一〇一

振替 東京二―一八〇番

電話 東京(03)二九四一―一一(大代表)

印刷／凸版印刷株式会社

検印省略

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申してください。

定価はカバーに表示してあります。

©Daizo Kusayanagi 1976 Printed in Japan

「うつくしい女」とは、どんな女か^{ひと}

本書を刊行した理由について

主婦の友社の木本佳子さんから、女性評論を、それも若い世代にむけて書いてみませんかとすめられたとき、私は「もういいですよ」という断り方ことわをした。「もういいですよ」は実感である。昭和43年の春、「愛される心」を上梓して以来、若い女性のための文章は十数冊の本にまとまっている。だいたいテーマも語り尽したし、私の心にのこった言葉・文章・詩・短歌・俳句・風景もほとんど持ち出した感じである。そこで、ちょっと億劫おっくうになっていた、ともいえる。が、木本さんはさすがに第一線で活躍する編集者だった。二つのことをいった。

第一は、読者がかわっている、ということだった。なるほど、と思った。「愛される心」のまえがきで、私は「男の僕がお嬢さんたちにお説教するような本を書いた」理由を三つほど、挙げた。それをいま引用させていただく。

「女の知恵とか仕草とかは、おバアちゃんからお母さん、お母さんからあなた、というふう

見真似の伝来なんだな。しかし、見真似の歴史が、ちょっと切れた。

戦争。これがひとつの原因です。着物の着方も、綿の打ち直し方も知らぬお母さんができちゃった。女の営みは、やはり、静かな社会で洗練されてゆくものなのです。

新しい生活様式。昔は、コブとオカ力でダシをとったな。夕方になると、台所からダシの匂いがしてきて、もうじきご飯だなとわかった。いまは、なんでそんなに忙しいのか、なんでそんなに急ぐのか、粉の上にお湯をぶっかけてダシをつくるんだね。時間は経済になって、そのぶん本を読んだりテレビを見たりできるけれど、女が身体で覚える生活の知恵はそれだけ減ったんじゃないかな。

お勤め。日中はお母さんと暮していないものね。見よう見真似もできません。無理ないな」
八年前の「愛される心」は、母娘断絶の間にある若い娘への警告として書いたものである。幸い、筆者の意図は読みとられ、読者の三分の一は娘たちの両親や先輩だった。そしてまた、娘たちの間にも「教わりたい」「叱られたい」の気風が残っていたように思う。しかし、木本さんの「読者が変った」は、年齢的に変ったばかりではなく、**新品種**のような女性が登場しているのだという。このことは、木本さんに指摘されるまでもなく、私自身も痛感していた。たとえば、本書の第11章「女の幼児性・泥・埃に悩むN子への手紙」にも書いておいたように、若い女のパンタロンのために金沢の成巽閣はタタミは泥だらけになってしまっているのである。

この八年の間に、交通・通信・住宅・衣服・食事など、社会生活の条件が著しくかわった。それにつれて、若い女性もかわったのである。いや、「かえられた」といってもよいであろう。もはや、彼女たちは祖母や母親の持つ文化から断絶しているばかりではなく、社会生活を営む人間としての原理・原則からもあやうく断絶しようとしている。しかし、私は彼女たちを、変種だとは思わない。精神的栄養が足りないのだと考えている。

たとえば、新幹線や航空機の中で見かける風景だが、いまの子どもはじつに液体を飲みたがる。ジュースやコーラを目の仇のようにして咽喉に流しこむ。親たちは決してこれを抑制しようとしなない。「渴^{かわ}き」を我慢させることは精神的訓練に役立つし、「渴^{かわ}き」のすえに飲む水の味が最高なことを教えられるのだが、親たちは無暗矢鱈に液体を与えてしまうのだ。したがって、子どもたちは「渴^{かわ}き」を知らない。「渴^{かわ}き」に耐えられない。「渴^{かわ}き」の後の水のうまさに「生かされている」という「賦存」のよろこびを知ることがない。

子どもたちが成長し、社会に出て、独身貴族という存在になると、彼女たちは化粧・ファッション・食事・旅行等にも、渴^{かわ}きを知らなくなる。目的は、時間と費用さえかければ到達できるのである。できるものだから、どんなに時間と費用をかけても到達できぬ価値が、この世の中に存在していることに気がつかなくなる。そういう価値に焦^こがれたり、怖れたり、渴^{かわ}きを感じることがなくなりつつある。若い女性ばかりか男性もそうだが、男性はマイカー、マイホーム、そしてゴルフの会員権が手に入ると、「一巻のおわり」で、あまり本も読まないし、

美しいもののために涙を流すこともなくなる。

せめてと思い、若い女性のために、書くことにした。木本さんの挙げた第二の理由は、「手紙体で書くことの意味」である。なるほど、いわれるとおり、今日の若い女性には学校・職場・稽古場で「集団教育」を受けている。集団教育ではあっても、要するに、「教えるもの」と「教わるもの」は、一対一で対面しているわけだが、「教わるもの」はやはり自分のペースを持ちにくい。集団には集団のペースがあつて、それに自分のペースをあわせてしまう。「手紙体」の文章なら、読者はものを食べながら、音楽を聞きながら、雪の中を走る列車の椅子にいながら、つまり、どんな受容条件の中でも自分のペースを失わずにすむだろう。

以上のような理由から私は筆を執った。雑誌「アイ」に十八か月連載され、終ったあとで加筆訂正し、若い娘たちに贈ることにした。

いままでの「お嬢さんシリーズ」とはちょっと違ったものになつたと思つてゐる。従来のものは、ふだん着を着たお嬢さんに語りかけてきた。街頭で、職場で、喫茶店で、列車のシートで、語りかけてきた。

本書のは、そういう趣きもあるが、それよりもお風呂で身体を流してやりながら話している趣きである。私の年令のゆえでもある。と同時に、今の若い娘が、いつまでたつても、どこかに「子どもっぽさ」「幼児性」を匂わせているからである。しかも、それを楽しんだり、そこに逃げこんだり、あるいはそれを売りものにしてゐる傾向があるからだ。

題名は、じつをいうと「なんの取柄もないあなたへ」にしたかった。が、それでは読者の反感を買うであらうといわれ、「美しき女への条件」にした。

ほんとうは「厳しき女」と書きたかった。「厳」には「うつくし」という読み方がある。この場合の「うつくし」は、過不足のない、研ぎすまされた状態をいうのである。たとえば、幸田文さんの起居振舞、もののいい方である。ジョセフィン・ペーカーが自動車から降りるときの姿勢である。仲居さんあがりの女将の挨拶である。淡谷のり子さんの発声法である。

「厳し」という言葉の範囲には顔のつくりは入っていない。が、眼の光は入っている。声の良し悪しは入っていないが、ものの言い方は入っている。体型は入っていないが、歩き方は入っている。仕事の成否は入っていないが、それを成し遂げる過程での努力は入っている。幸福な結婚は入っていないが、離婚したあとの爽やかな「生きざま」は入っている。宝石の保有数や学歴の程度は入っていないが、古寺の襖や障子のひき手金具を「おもしろし」と見る感性は入っている。

どうか、「うつくしく」なってほしいと思う。近頃、妙に懈怠（けんたい）そうな女、さわがしい女、自己顕示欲のつよい女、臭（くさ）そうな女、背伸びする女、しらけている女がふえてきたように見えるのだ。つまり、「うつくしい女」に対する偏差値が目立ちすぎている。本書の中で、若い娘に對する言葉がときにはつよくなっているが、それは「女の偏差値」をいくらかでも埋めたいとの願いから出ている。おゆるしあれ。

昭和丙辰初秋、最初の満月の日に

草柳大蔵

☆本書の刊行まで主婦の友社の出版局の方々の手を煩わせ、また若い友人山下勝利君の協力を得た。ここに感謝いたします。

延齡草^{えんれいそう}のために三十時間の旅ができるか ⑩「なんの取柄もない娘」への手紙

「優しさ」を口にしないで暮し給え ②③世間から黙殺されている貴女へ

全国の千坂京子さま、私は泣いています ③⑥一生を「上げ底」で暮そうとする女たちへ

鳩の死骸を片付けてくれた女 ⑤⑩「やって貰う」だけの人生を送るあなたへ

言葉かずのすくない貴女^{あなた}へ ⑥④口かずは多いのに、意味の通じぬ悲しさ

グリーン・ピースのような顔をしている女 ⑦⑧「裸づら」「同棲づら」「留年づら」の特徴について

嘘の泥人形をこねている人間の実像 ⑨②じつは、意志薄弱なあなたへの手紙

美しさだけを選び採れる女 ⑩⑤眼鏡を拭いて渡してくれたあなたへ

「青い空」と書かなければ空の青さは表現できないか ⑪⑧資質がないのでマキシを穿く^はあなたへ

なぜ、乱暴に野菊を摘むの？¹³⁴ 女の「高のぞみ」がわからない、あなたへ

振りむかない青春って怖いな¹⁴⁵ その幼児性・泥・埃に悩むN子への手紙

女の美意識は遺伝ではないよ¹⁵⁸ 「見られる女」から脱け出すために

孤独は苦悩を癒す良薬なのに…¹⁷¹ すぐ相談・同情・連帯したがるあなたへ

きれいな人間に逢いたいね¹⁸⁵ 「カマトト女が多い」と嘆くあなたへ

「朝食」の献立の重要さを「存知でしょうか」²⁰⁰ 万事、短絡する時代に生きる貴女へ

私という人は意外とお仕事が好きなんです²¹³ あなたに贈る「厚顔・無恥・低能・用語集」

寝顔を見せる未熟な女の出来具合²²⁷ 「道」を失った、悲しいあなたへ

進学・お勤め・お稽古事、全部「中途半端」なんだね²⁴¹ 自己正当化だけは名人のあなたへ

延齡草えんれいそうのために三十時間の旅ができるか

「なんの取柄もない娘」への手紙

「ツワー」と「トラベル」に寄せた手紙

お年賀状、ありがとう。毎年のことだけれど、印刷された賀状が多いので、その間にはさまざまな貴女の一枚が、すっきりと眼に入ったよ。肉声が届いたという感じだね。

A子さん。私宛に書いてくれた年賀状が、貴女が書きはじめてから何枚目のものか、あててみようか。三枚目か、四枚目じゃないかな。いや、直感的にそう思ったんだ。葉書の天地が一糎二糎ほどあいている。定規で測って、一糎二糎のところに鉛筆で薄く点を打って、それから左右は八糎ほどあけて、これも薄く点を打って、書き出したんじゃないかな。そう思えるほど、天地左右にきれいな余白をつけているね、貴女は。

A子さん。一枚目は高校時代のお友だちに書いたでしょう。天地左右の余白も考えずに、新

聞紙の上で二、三回練習して、さっさと書いてしまった。だから「おめでとうございます」の「ます」がうんと下のほうへ行って、見つともない字配りになった。しかも「今年もどうぞよろしくね」でとめておけばよいのに、「また一緒に旅行しましょう」だの「彼によろしくね」だのと、くだらないことを書くものだから、最後の「元旦」が葉書の左端に片寄って、落っこちそうになっている。ほんとうは出したくなかったんだろうけれど、破くのが勿体なくて出したんだね。二枚目も、まあ、似たりよったり。三枚目は高校の恩師宛ですか。こんどは、ちょっと気を張った。葉書の中におさまるように書いた。書いて気がついた。なんだ、はじめからデザインしておけばよかった、と。そう、そのとおりなんです。そこで、私のところにくれた年賀状がすっきりと書き上ったのだろうね。君、余白って、いいものでしょう。そこから、さわやかな酸素がしゅうしゅう吹き出してくるみたいだね。A子さんは、いつか「あんまり長い髪をして、長いもみあげをしている男の子はきらい」といったけれど、たしかにそういう風態の男の子は、雨の日の電車の中のような、暑苦しさが感じられるね。

A子さん。貴女の賀状の中に「今年こそ、と思っております」という一行があった。貴女は決意をのべているわけだが、私はその一行を読んだとき、「あ、かわいそうに」と感じたのだ。貴女が「今年こそ」と書いたとき、それは「なにかひとつ打ちこめるものを探したい」という決意の表明であるにはちがいないが、簡単にいえば貴女の「あせり」、もうすこし丁寧に言えば「昨年までの自分がイヤでイヤでたまらない気持」のあらわれ、といったほうがいいんじゃない

ないのかな。だから、私は「あ、かわいそうに」と思ったのです。

A子さん。あれは初秋だったね。あなたが「私って、九月がきらいなんです」と、突然、いったのは。私が頼んでおいたアズナヴールのLP盤と、それからカティ・サークのもうひとつ上のクラスのベリイズ・ベストの一瓶を探してくれ、「うらやましいわ。お好きなものがあって」と、私の前に置き、「九月になると蟬も鳴かなくなるし」とひとり言をつぶやいた。

私が半分冗談に「九月は遊ぶのに中途半端だからイヤなんだろう」というと、貴女は意外にも真剣な眼の色を見せて「ええ、そうなんです」と首を縦にふり、「くだらないでしょう、私って」と、白い風が立ちはじめた庭に視線をあてたまま、また、つぶやいた。

そうなんだな。貴女の年頃のお嬢さんて、なにひとつ取柄とりえがないというひとが多いんだな。女子大生の中には、そういう自分を自覚しながら、それでも「取柄なし」でも生きられる世の中だから、「テイク・イット・イージー」（楽にゆこう）という、一時、ニューヨークで流行した言葉を口の端はにのせたりするのがある。

いまの世の中、いってみれば全員が「参加賞」を貰えるレースみたいなもんだね。お稽古ごとにしたって、昔のように雑巾がけやら先輩の道具の手入れやらをやらされるといわけではない。一応は「お弟子」だが、実質は「生徒」あるいは「お客さん」だから、教えるほうもびしびしやらないんだね。決定的なことをいえば、「あんたは素質がないからやめたほうがいいよ」といつてくれる「師匠」がいないんだ。そんなことをいえば師匠が成り立ってゆかないも

の。昔は、「おまえさんのような覚えの悪い子はいないよ」と突き放され、口惜しく情なく、泣きながら家に帰ると、両親が「それをお稽古というんだよ」と叱り、また背中を押されて師匠の前にすわる。そんな屈辱の涙が芸というものを洗い上げてくれたものだ。いま、ちがうだろう。なにをやっても、「はい、結構よ」「あら、よく出来るじゃないの」と、おだてられ褒めそやされて、自分では「そうかなア」と思っているうちに、温習会や展覧会に出されて、そのときだけ中振袖の着物を着て、次第に上級のお免状を貰ってゆくんだね。

旅だってそうだろう。「そのひとつ」を恋い焦がれる旅、なんてあまりしないんじゃないか。「文学の旅・カラー版」とか「すてきな土地・おいしい食べもの」という記事を見て、お友達に電話して、「ね、ね、行ってみない？」で話がまとまってしまふ。ま、行かないより行ったほうがいいがね。案内書と首っぴきで行くものだから、合掌造りも仏像も庭も案内書に書いてあることを確認するだけの旅行になってしまう。こういう旅行を「ツワー」というんだね。「ツワー」とは「旅」のほかに「廻る」という意味がある。もうひとつの「旅」という英語、「トラベル」は「骨を折って経験を得る旅」だと、ダニエル・ブーアスチンというアメリカの学者が書いている。そう、もう十五年ほど前になるかな。

つまりね、お嬢さんたちはずいぶん旅行に出かけるけれど、その大半が案内書を見て「よさそうだから行ってみる」という旅行なんじゃないかな。「どんな思いをしてもいいからそこへ行く」という、対象に恋い焦がれての旅って、あまりしないんじゃないかね。

延齡草えんれいそうが見たくて、ひとりで春の北海道を訪ね歩いた——いや、私ではなく、ある若い女性

でしたよ。「でした」と過去形でいったのは戦前の話だからさ。東京から北海道へゆくには、いまのように飛行機があるわけではないし、フェリーボートで寝ながらゆけるわけでもない。汽車と船ですよ。上野から三十数時間、揺られ揺られてゆくんですよ。彼女は、その道中、「ああ、延齡草」と胸の中で繰りかえし、ある歌の一節を小さな声で何回も歌っていたそう。

牧場の若草かげろう陽炎燃えて

森には桂の新緑きざ萌し

雲ゆく雲雀ひばりに延齡草えんれいそうの

真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の光

小河の潯ほとりをさまよい行けば

美しからずや咲く水芭蕉

春の日の この北の国幸多し

ご存知かもしれないが、北大寮歌「都ぞ弥生」の一節（四番）です。彼女は、兄の友人が歌っているのを聞いて、「延齡草の、真白の花影さゆらぎて立つ」に、胸がきゅっと締めつけられたそう。それからお小遣を貯金した。時刻表を買った。髪を短く切った。リュックサックの詰め方を習った。北海道へ旅立ったのは、歌を聞いてから一年半の後だった。旅費を貯める